

## 御文についての一考察

### はじめ

御文は、本願寺第八世蓮如上人のお手紙です。その後、御歴代の御法主が改版されています。しかし、すべてを確認することは、なかなかできません。また、江戸時代偽版御文が近畿地方で出版され、取り締まった記録が「偽版御文章の流布について 本願寺資料研究所」からPDFで公開されています。

### 1. 御文の寺院の扱いについて

御文は、本願寺第八世蓮如上人が、真宗の教義を平易な形で示されたお手紙です。それを、ご自身で整理され大筋(六十通)にまとめられ、それを基に実如上人が編纂されたものです。現在は、大谷大学博物館 YouTube で見ることができます。

この文に、御文と書いてあるだけで、筆者が大派の教えを受けたことがわかります。本派では、御文章といい、仏光寺派、興正寺派では、御勸章といいます。御文と御勸章では内容が異なります。

本願寺に連なる寺院には御文が備えられています。毎日の晨朝勤行の後に御文を拝読いたします。御文は全体で二百数十通あり、そのうちの八十通を五帖(5冊)にしています。一帖目から四帖目までは、日付が記されています。五帖目は、日付の記載はありません。また、五帖御文以外は、帖外御文として、出版されています。御文のデジタル版は、浄土真宗本願寺派のHPに各聖典をテキストにしたファイルがあります。本派は早くから聖典のデジタル化を行いました。

御文の一帖目一通(ある人いわく)は、文明3年7月15日 蓮如上人57歳のときの作です。その年7月27日に吉崎御坊が落成し、二俣本泉寺より入坊されました。

蓮如上人の吉崎御坊時代は、文明7年8月21日 上人吉崎退出(61歳)河内出口へ赴くまでの、わずか4年間です。しかし、それから今日まで、蓮如上人を慕い、毎年4月23日より5月2日までの間、吉崎は蓮如忌で賑わいます。山頂の吉崎御坊跡地は、文科省の史跡として、今でも地元の人の手により守られています。また、吉崎で亡くなった蓮如上人の娘、見玉尼のお墓があります。麓の願慶寺に伝わる『嫁おどしの面』等もあり、加賀の千代にの句も残されています。「うつむいた とこなうてなや すみれ草」  
室町時代末期から今日に至る歴史の香りを聴くことができます。

### 2. 御文の概略

#### 一帖目

文明 3年 7月15日より  
文明 5年 9月下旬第二日まで  
15通

#### 二帖目

文明 5年12月 8日より  
文明 6年 7月 9日まで  
15通

#### 三帖目

文明 6年 7月14日より  
文明 8年 7月18日まで  
13通

#### 四帖目

文明 9年 正月 8日より  
明応 7年11月21日まで

## 15通

### 五帖目

未代無知 より 当流勸化まで

### 22通

文明7年7月15日 三帖目十通（神明六ヶ条）の御文が吉崎での最後の御文となります。

三帖目十三通（最後）は、文明8年7月18日（年貢所当）上人62歳。

四帖目は文明9年上人63歳から明応7年11月21日上人84歳の21年間に書かれた15通の御文を編纂されたものです。蓮如上人は、明応8年2月大阪より山科に移り、同年3月25日遷化されました。上人85歳  
このようにして見ると、御文の多くは、吉崎時代に書かれたものです。加賀の一向一揆については、法義相続を第一として争いごとを避けたいという思いが御文の中に表れています。最近の説では、帖外御文の中に、武器を揃えるなどの御文もあるため、新たな研究もなされると思います。

時代は、一向一揆の時代です。吉崎時代の蓮如上人には、多くのことが起こりました。

文明5年7月 富樫幸千代は甲斐党と組み、加賀国守富樫政親を不意打ちにする。政親はやぶれ、越前朝倉をたよりに落ちのびる。

文明6年3月28日 南大門多屋より出火、多屋九坊、本坊、南北の大門が焼失

文明6年4月 仮本堂ができる

文明6年7月26日 文明一揆 富樫政親は朝倉勢と加賀に侵攻、富樫幸千代、専修寺連合軍と戦う。

文明6年11月 富樫政親が勝利する。

文明7年 本坊再建。

文明7年3月 富樫政親の加賀門徒への弾圧強まる。加賀の衆徒政親にやぶれる 有力門徒、瑞泉寺に亡命。

文明7年4月 洲崎藤右衛門入道慶覚、湯涌次郎右衛門入道行法、蓮如に政親との和解の仲介を求めると、下間蓮崇の曲言により蓮如に伝わらず越中に帰る。

文明7年8月 このような世相の中で、その年8月に吉崎を去る結果になりました。また、下間蓮崇を破門しました。

また、吉崎では、愛娘見玉尼が文明4年8月 25歳の若さで短い生涯を閉じた。遺骨は、北大門側に埋められ、松の木が植えられたという。今も御坊阿智には、見玉尼の墓所があり、地元の人々により年忌も勤められています。詳しくは、「蓮如 北陸時を行く 朝倉喜祐」「蓮如上人とその五人の妻たち 筆内幸子」「蓮如実伝 辻川達雄」他を参照されたい。見玉尼の御文は、

### 帖外御文

十16第二女見玉尼の往生についてのべる。

静かにおもみれば、それ人の性は名によるともうしはんべるも、まことにさぞとおもいられたり。しかれば、今度往生せし亡者の名を見玉といえるは、玉をみるとよむなり。されば、いかなる玉ぞといえ、真如法性の妙理、如意宝珠をみるといえるころなり。これによりて、かの比丘尼見玉房は、もとは禅宗の喝食なりしが、なかころは浄華院の門徒となるといへども、不思議の宿縁にひかれて、ちかごろは当流の信心のころをえたり。そのいわれは去ぬる文明第二・十二月五日に伯母にてありしもの死去せしを、ふかくなげきおもうところに、うちつづきまたあくるおなじき文明第三・二月六日に、姉にてありし者おなじく臨終す。ひとかたならぬなげきによりて、その身もやまいつきてやすからぬ体なり。ついにそのなげきのつもりにや、病となりけるが、それよりして違例の気なおりえずして、当年五月十日より病の床に伏して、首尾九十四日にあたりて往生す。されば、病中のあいだにおいてもうすことは、年来浄華院流の安心のかたをふりすてて、当流の安心を決定せしむるよしをもうしいだして、よろこぶことかぎりな

し。ことに臨終より一日ばかりさきには、なおなお安心決定せしむねをもうし、また看病人の数日のほねおりなどをねんごろにもうし、そのほか平生におもいしこともごとくもうしいだして、ついに八月十四日の廢のおわりに頭北面西にふして往生をとげにけり。

されば、看病人もまたたれやの人までもさりともとおもいし色のみえつるに、かぎりあるいのちなれま、力なく無常の風にさそわれて、かようにむなしくなりぬれば、いまさらのようにおもいて、いかなる人までも感涙をもよおさぬはなかりけり。まことにこの亡者は宿善開發の機といいつべし。かかる不思議の弥陀如来の願力の強縁にあいたてまつりしゆえにや、この北国地にくだりて往生をとげしいわれによりて、数万人のとむらいをえたるは、ただごととおぼえはんべらざりしことなり。

それについてここにある人の不思議の夢想を八月十五日の茶毘の夜あかつきがたに感ぜしことあり。その夢にいわく、所詮葬送の庭において、むなしきけむりとなりし白骨のなかより三本の青蓮華出生す。その花のなかより一寸ばかりの金ほとけひかりをはなちていでたまうとみる。さて、いくほどもなくして蝶となりてうせける、とみるほどに、やがて夢さめおわりぬ。

これすなわち、見玉といえる名の真如法性の玉をあらわせるすがたなり。蝶となりてうせぬとみゆる、そのたましい蝶となりて法性のそら極樂世界涅槃のみやこへまいりぬるといえるところなり、と不審もなくしられたり。これによりて、この当山に葬所をかたの亡者往生せしによりてひらけしことも、不思議なり。ことに、茶毘のまえには雨ふりつれども、そのときはそらはれて月もさやけくして、紫雲たなびき月輪にうつりて五色なり、と人あまねくこれをみる。まことにこの亡者においては、往生極樂をとげし一定の瑞相を人にしらしむるか、とおぼえはんべるものなり。

しかれば、この比丘尼見玉このたびの往生をもてみなみなまことに善知識とおもいて、一切の男女にいたるまで、一念歸命の信心を決定して、佛恩報謝のためには念佛もうしたまわば、かならずしも一佛浄土の来縁なるべきものなり。あなかしこあなかしこ。

文明五（四？）年八月廿二日これを書く。

「帖外御文ひもとき 西山邦彦」より

歴史的なことは、またの機会にします。

在家の法要では、御文の五帖目を拝読することが多く、五帖目のみを備えてある家もあります。

御文の内容につきましては、『御文章講話 杖紫郎 永田文堂昌』『御ふみ 出雲路修 平凡社東洋文庫』『御文章 稲城選恵』など多くの書籍があります。それらをお読みになれば、内容は理解され、時代背景もお解りいただけると思います。

## 2. 御文の疑問

在家に備えられている御文の多くは、第二十世 達如上人、第二十一世 巖如上人、第二十二世 現如上人の版が多くあります。しかし、まれに真如上人の御文があつたりします。寺院では、拝読することが目的で五帖御文一揃えで、各上人の御文をお持ちの寺院は少ないと思います。

御文が、各上人でどのように異なるか、昔からの疑問でした。そこで、手元にあります御文を見比べながら考察したいと思います。

## 資料

- ・顕如上人 一冊合本
- ・教如上人 一冊合本
- ・宣如上人 三冊（合本二冊 五帖目一冊）
- ・琢如上人 一冊 合本
- ・常如上人 一冊 合本
- ・一如上人 五冊 一帖目 注入り手書き 三帖目 注入り手書き 四

帖目 注入り 手書き 四帖目 五帖目) ・真如上人 五冊 (一帖目 二帖目 三帖目 四帖目 五帖目)  
・従如上人 二冊 (三帖目 五帖目) ・乗如上人 四冊 (一帖目 三帖目 四帖目 五帖目) ・達如上人  
五冊 (一帖目 二帖目 三帖目 四帖目 五帖目) ・巖如上人 五冊 (一帖目 二帖目 三帖目 四帖目 五  
帖目) ・現如上人 五冊 (一帖目 二帖目 三帖目 四帖目 五帖目)

証如上人、顕如上人、教如上人の御文は、国会図書館デジタル版があります。

国会図書館デジタル版は、著作権の切れた仏教書が多くあります。

古書をもっと利用し、先達の智慧を簡単に求めることができます。

無量寿経、教行信証、正信偈、または、著者の先生方で検索すると、多くの書物が選択され驚きます。これらを手がかりにさらに調べることができます。

これから、御文を見ていきましょう。

一部文章は、[Wikipedia](#) を使用しています。

一部画像は、[Wikipedia](#) を使用しています。

## 御文の花押



証如上人花押 四帖目 [Wikipedia](#)

証如上人 (証如 [1])

永正 13 年 11 月 20 日 天文 23 年 8 月 13 日

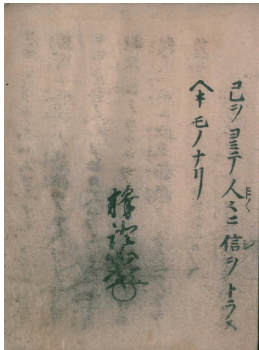
1516 年 12 月 23 日 - 1554 年 9 月 19 日

1516 年 12 月 13 日 - 1554 年 9 月 9 日

上段・旧暦 中段・グレゴリオ暦換算 [2] 下段・ユリウス暦

関白九条尚経の猶子となる。

幼名 光仙丸 法名 証如 院号 信受院  
諱 光教 尊称 証如上人 宗旨 浄土真宗  
宗派 (後の本願寺系諸派)



証如 (しょうによ、証如 [1]) [3] は、戦国時代の浄土真宗の僧。

諱は光教。院号は信受院。本願寺第 10 世。本願寺第 8 世宗主 蓮如の 曾孫。

生涯 [編集]

年齢は、数え年。日付は文献との整合を保つため、

いずれも旧暦 (宣明暦) 表示を用いる (生歿年月日を除く)。

証如影像 永正 13 年 11 月 20 日 (1516 年 12 月 23 日 [2])、誕生。父は遍増院円如 [4]。母は慶寿院鎮永尼 [5]。大永 5 年 (1525 年)、父方の祖父である本願寺第 9 世宗主実如の死去により、10 歳で継承し、本願寺第 10 世宗主となる。実如の弟で証如の母方の祖父である蓮淳の後見を受ける。

大永 7 年 (1527 年)、当時の本願寺教団と中央権力との親睦を深め安泰を図るため、摂関家に接近して関白九条尚経の猶子となっている。

享祿 4 年 (1531 年)、本願寺教団内部で対立 (後の山科本願寺の戦いまで含めて享祿・天文の乱と呼ぶ) が起こるが、証如はこれを抑えて法主の指導力強化に努めた。

天文元年 (1532 年) 年には、管領細川晴元の要請を受けて門徒を動員し、三好元長を敗死に追いやったが、晴元はこれによってかえって本願寺の実力を恐れ、京都の日蓮宗教団や六角定頼と手を結んで、当時の本願寺の本拠地であった山科本願寺を攻撃し、これを焼き討ちにした (天文法華の乱)。山科本願寺を追われた証如は、居所を大坂の石山御坊に移し、石山本願寺を新たな教団の本拠地とした。その後は晴元の養女如春尼 (左大臣三条公頼の末娘。長姉は晴元に、次姉は武田信玄に嫁ぐ) を長男顕如の妻に迎えて晴元と和睦し、室町幕府とも親密な関係を築いて中央との



関係修復に努め、本願寺の体制強化を進めた。また、天文法華の乱を教訓として、各地の一向一揆に対してもみだりに乱を起こさないように命じている。

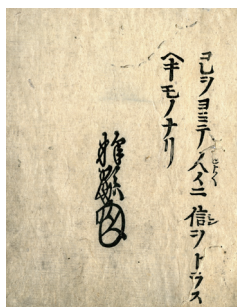
天文 15 年（1546 年）には金沢に尾山御坊を築いて同地方における門徒の統制を強化したが、これは朝倉氏との対立もあって、証如の時代には必ずしも十分に達成されなかった。

天文 18 年（1549 年）、後奈良天皇より『三十六人家集』を下賜される。これは、後に顕如の時代に石山合戦の和議に尽くした前関白近衛前久に贈ろうとしたものの、「天下の宝物をみだりに遣り取りすべきでない」として辞退したという代物で現在も西本願寺に所蔵されている国宝である。また、証如の代に本願寺は、加賀一向一揆の調停という形で北陸地方の門徒集団への介入を深める。

天文 23 年 8 月 13 日（1554 年 9 月 19 日 [2]）、39 歳にて示寂。本願寺は 12 歳の顕如が継承する。

## 脚注欄 [編集]

- 1.^ a b 証如…新字体が用いられる以前の文献に用いられた旧字体。
- 2.^ a b c グレゴリオ暦換算。本願寺派では、グレゴリオ暦に換算した生没年を用いる。
- 3.^ 法主を務めた寺号「本願寺」に諱を付して本願寺光教（ほんがんじ みつのり）とも称される。この「本願寺」は便宜的に付されたものであって、氏や姓ではない。
- 4.^ 円如は、本願寺 9 世宗主実如の第 3 子（次男）。法宗継職前に示寂したため歴代に入らない。
- 5.^ 蓮如の 6 男蓮淳の娘。



### 顕如上人

天文 12 年 1 月 7 日 - 天正 20 年 11 月 24 日

1543 年 2 月 20 日 - 1592 年 12 月 27 日

### 顕如影像

幼名 茶々 法名 顕如

院号 信楽院 諱 光佐 尊称 顕如上人

生地 大坂 没地 西本願寺 宗旨 浄土真宗 宗派 (後の本願寺系諸派)

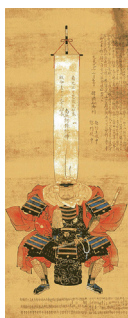
寺院 石山本願寺 師 証如 弟子 教如 准如

顕如(けんによ)は、戦国時代から安土桃山時代の浄土真宗の僧。顕如は号であり、諱は光佐。院号は信楽院。本願寺第十一世。妻は三条公頼の三女の如春尼。子に教如・顕尊・准如がいる。

織田信長の宿敵であり、武力によって天下統一を狙う信長を仏敵とし、全国の宗派に信長打倒を呼びかけ信長と決戦を挑む。軍事的、経済的にも圧倒的に有利な織田軍相手に調略によって信長包囲網を結成し、10 年以上にわたって信長と激しい攻防を繰り広げた。

### 目次

- 1 生涯
  - 1.1 誕生
  - 1.2 教団の最盛期を築く
  - 1.3 信長包囲網
  - 1.4 晩年
- 2 脚注
- 3 関連項目



天文12年1月7日(1543年2月20日)、本願寺第十世証如の長子として誕生。母は庭田重親の娘。教団の最盛期を築く

弘治3年(1557年)4月17日、六角定頼の猶子の如春尼と結婚した。如春尼の実父は三条公頼だが、本願寺との縁戚関係の構築を望む細川晴元の意向により、晴元の猶子となった。その後さらに六角定頼の猶子となっていた。ちなみに実の姉は武田信玄の正室・三条夫人である。

政略結婚[1]とはいえ、二人の夫婦仲は良く、結婚31年目の天正16年(1588年)の七夕には、

「いくとせもちぎりかわらぬ七夕の、けふまちへたるあふせなるらん」 顕如「いくとせのかはらぬ物を七夕の、けふめづらしきあうせなるらん」 如春尼

と歌を詠み合っている。

顕如の時代、本願寺教団は、父の時代以来進めてきた門徒による一向一揆の掌握に務める一方、管領の細川家や京の公家衆との縁戚関係を深めており、経済的・軍事的な要衝である石山本願寺を拠点として、主に畿内を中心に本願寺派の寺を配置し、大名に匹敵する権力を有するようになり、教団は最盛期を迎えていた。

顕如画像幅 石川県立歴史博物館所蔵 18世紀

しかし、本願寺は武家の封建関係の外でこのような権力を握っていたことから、延暦寺や堺の町衆などと同様に、永禄11年(1568年)には將軍・足利義昭を奉じて上洛し、義昭を通じて影響力を強めていた織田信長による圧迫を受けるようになり、顕如は信長と敵対する。

元亀元年(1570年)に本願寺と織田氏は交戦状態に入った(野田城・福島城の戦い)。一連の抗争は石山合戦と呼ばれる。その後、元亀年間に將軍・義昭と信長は反目し、義昭は甲斐国の武田氏をはじめ越前国の朝倉氏、近江国の浅井氏らに反織田勢力を迎合し、信長包囲網を構築した。本願寺も信長包囲網の一角を担い、顕如は自ら石山本願寺に籠城し、雑賀衆などの友好を結ぶ土豪勢力と協力する、地方の門徒組織を動員して一向一揆を起こさせる(長島一向一揆など)などして信長に対抗した。

しかし、元亀4年(1573年)4月には武田信玄の死を契機に包囲網が破綻。朝倉・浅井・足利などの同盟勢力は次々と織田氏によって滅ぼされ、木津川口の戦いなどで抵抗を続けた本願寺も最終的には抗戦継続を諦め、朝廷を和平の仲介役として天正8年(1580年)に信長と和睦。顕如自身は石山を退去し紀伊国鷺森別院に移った。

本能寺の変後、信長に代わって畿内の実権を握った羽柴秀吉(豊臣秀吉)と和解し、天正13年(1585年)に石山本願寺の寺内町をもとに秀吉が建設した大坂の郊外にある摂津中島(後の天満の町)に転居して、天満本願寺を建立する。ここはルイス・フロイスいわく「秀吉の宮殿の前方にある孤立した低地」で、さらに「住居に壁をめぐらしたり堀を作る」ことを禁じられるなど[2]、本願寺は豊臣政権の強い影響下に置かれることになった。一方で、大坂城下町建設に本願寺とその門徒が持つ経済力・技術力を利用する狙いもあった。

天正14年(1586年)、秀吉に九州征伐に同行するよう命じられ、下関に滞在した[3]。

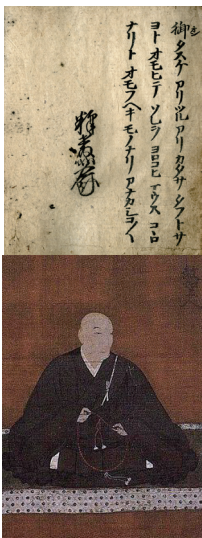
天正17年(1589年)に京都聚楽第の壁に書かれた落書の犯人が本願寺寺内町に逃げ込み、更に天満に秀吉から追われていた斯波義銀・細川昭元・尾藤知宣が隠れているという情報を入手したことから3月に石田三成によって寺内成敗(寺内町の取締とこれらの容疑者を匿ったとされた2町の破壊)が行われた。斯波らは捕らえられなかったものの、容疑者を匿ったとされた天満の町人63名が京都六条河原で磔とされ、顕如は2月29日に秀吉から浪人の逃亡を見逃がしていたことを理由に叱責を蒙り(『言経卿記』)、3月8日には容疑者隠匿に関与した願得寺顕悟(蓮如第10男実悟長子)に自害を命じるなど、かつての領主権力は完全に失われていった[4]。さらに天正19年(1591年)に秀吉によって京都の七条堀川の地に寺地を与えられ、京都に本願寺教団を再興した。

天正 20 年 11 月 24 日（1592 年 12 月 27 日）、50 歳にて示寂。

顕如が没すると、石山本願寺退去時の信長への対応をめぐる顕如と意見の食い違いがあった長男の教如（強硬派）に代わり、三男の准如（和睦派）が 12 世宗主に立てられることになった（次男は興正寺顕尊）。こうして教団内部で対立状況が継続する中、徳川家康による寺地の寄進がなされ、慶長 7 年（1602 年）、教如と彼を支持する勢力は独立して東本願寺を建立した。このため、本願寺は、准如の本願寺（西本願寺）と教如の本願寺とに分裂することになった。

## 脚注

- 1.^ 細川晴元は六角定頼の娘婿であり、両者はかつて享禄の錯乱の際に連合して山科本願寺を焼き払った。その後の政情の変化によって本願寺との和解に迫られた両者は、顕如誕生の翌年には証如に縁談を持ちかけており父親の証如を困惑させているが最終的にこれに応じた（『天文日記』天文 13 年 7 月 26・30 日・閏 11 月 7 日・天文 15 年 6 月 22 日各条）（参照：水野智之『室町時代公武関係の研究』（吉川弘文館、2005 年）ISBN 978-4-642-02847-9 P253-257・320-321）。
- 2.^ 完訳フロイス日本史 第 4 章「大坂城と新市街の建設について」
- 3.^ 完訳フロイス日本史 第 13 章「薩摩国に対抗し、関白が下（しも）の地方へ向かい出発したことについて」
- 4.^ 鍛代敏雄「摂津中島本願寺寺内町考」（初出：『地方史研究』206 号（1987 年） / 所収：『中世後期の寺社と経済』（思文閣出版、1999 年）第二編第四章「寺内町の解体と再編」）



### 教如上人（教如）

永禄元年 9 月 16 日 - 慶長 19 年 10 月 5 日（旧暦）

1558 年 10 月 27 日 [2] - 1614 年 11 月 6 日 [3]（新暦）

幼名 茶々麿 法名 教如 院号 信淨院

諱 光寿 尊称 教如上人 生地 石山本願寺 宗旨 浄土真宗 宗派（後の、東本願寺系諸派） 寺院 本願寺（東本願寺） 師 顕如

教如（きょうによ、教如 [1]）[5] は、安土桃山時代から江戸時代にかけての浄土真宗の僧。東本願寺第 12 代法主 [6]。

### 目次 [非表示]

- 1 生涯 1.1 誕生
  - 1.2 石山合戦
  - 1.3 本願寺継承
  - 1.4 退隠
  - 1.5 本願寺教団の東西分裂
  - 1.6 入寂
- 教如像
- 2 分立による本願寺の呼称
  - 3 関連項目
  - 4 脚注
  - 5 参考文献

## 6 関連書籍

年齢は、数え年。日付は文献との整合を保つため、いずれも旧暦（宣明暦）表示を用いる（生歿年月日を除く）。

### 誕生

永禄元年9月16日（1558年10月27日 [2]）、顕如の長男として誕生。永禄13年（1570年）2月、父・顕如のもと13歳で得度。

### 石山合戦

元亀元年9月12日（1570年10月11日）、織田信長との間で石山合戦が始まる。父・顕如を助けて信長と徹底抗戦する。元亀2年（1571年）6月、朝倉義景の娘と婚約。

天正8年（1580年）3月、顕如は正親町天皇の勅使・近衛前久の仲介による講和を受け入れ、石山本願寺から紀伊国鷺森（和歌山県和歌山市）へ退去する。しかし教如は徹底抗戦を主張する。そのため顕如は、教如を義絶 [7] する。義絶後も石山本願寺に籠城する（大坂拘様）。8月2日、近衛前久の説得に応じ、信長に石山本願寺を明け渡す [8]。その直後に、石山本願寺は失火により炎上し灰燼に帰した。

天正10年（1582年）6月2日、本能寺の変が起こり、信長は暗殺された。6月23日、後陽成天皇は顕如に教如の赦免を提案。6月27日、顕如より義絶を赦免される。赦免後は、顕如とともに住し、寺務を補佐する。

### 本願寺継承

文禄元年（1592年）11月24日、顕如の示寂にともない本願寺を継承する。この時、石山合戦で籠城した強硬派を側近に置き、顕如と共に鷺森に退去した穏健派は重用しなかった為、教団内に対立が起こる。

### 退隠

文禄2年（1593年）閏9月12日、豊臣秀吉は教如を大坂に呼び、下記の十一か条を示した。穏健派が秀吉に働きかけたと考えられる。

1. 大坂ニ居スワラレ候事。
2. 信長様御一類ニハ大敵ニテ候事。
3. 太閤様の御代ニテ、雑賀ヨリ貝塚へ召シ寄セラレ、貝塚ヨリ天満へ召シ出サレ、天満ヨリ七条へ遣シアゲラレ候事、御恩ト思シ召サレ候事。
4. 当門跡 [9] 不行儀のこと、先門跡 [10] 時ヨリ連レント申上候事。
5. 代ユヅリ状コリアル事、先代 [10] ヨリユヅリ状モコリアル由ノ事。
6. 先門跡 [10] セツカンノ者メシ出サレ候事。
7. メシ出サレ候人ヨリモ、罷リイデ候者ドモ、不届キニ思シ候事。
8. 当門主 [9] 妻女ノ事。
9. ソコ心ヨリ、トドカザル心中ヲ引キ直シ、先門跡ノゴトク殊勝ニタシマミ申スベキ事。
10. 右ノゴトクタシナミ候ハバ、十年家ヲモチ、十年メニ理門 [11] ヘアイ渡サルベキ事、是ハカタ手ウチノ仰付ラレ様ニテ候得共、新門跡 [11] コノウチ御目ヲカケラレ候間、カクノゴドク由ニ候。
11. 心ノタシナミモナルマジキト存ゼラレ候ハバ、三千国無役ニ下サルベク候アイダ、御茶ノ湯トモダチナサレテ候テ、右メシイダシ候イタヅラモノ共メシツレ。御奉公候ヘトノ儀ニ候。

つまり、問題点（上記の1～8）を挙げ、10年後に弟の准如に本願寺法主を譲る旨の命が下される。この事を聞いた強硬派の坊官が、秀吉に異義を申し立てる。秀吉の怒りを買って「今すぐ退隠せよ」との命が下される。閏9月16日、准如に法主が継承する事が決定し、教如は退隠させられる。



本願寺教団の東西分裂 [編集]

慶長3年（1598年）8月18日、秀吉歿。慶長7年（1602年）、後陽成天皇の勅許を背景に徳川家康より京都七条烏丸に四町四方の寺領が寄進され、七条堀川の本願寺の一角にある堂舎を、その地に移す。慶長8年（1603年）、上野厩橋（群馬県前橋市）の妙安寺より「親鸞上人木像」を迎え、東本願寺が分立する。

一説によると、若き日に三河一向一揆に苦しめられた事のある家康が、本願寺の勢力を弱体化させるために、教如を唆して本願寺を分裂させたと言われているが、明確にその意図が記された史料がないため断定はできない。

現在の真宗大谷派はこの時の経緯について、「教如は法主を退隠してからも各地の門徒へ名号本尊や消息（手紙）の配布といった法主としての活動を続けており、本願寺教団は関ヶ原の戦いよりも前から准如を法主とするグループと教如を法主とするグループに分裂していた。徳川家康の寺領寄進は本願寺を分裂させるためというより、元々分裂状態にあった本願寺教団の現状を追認したに過ぎない」という見解を示している。[12]

東西本願寺の分立が後世に与えた影響については、『戦国時代には大名に匹敵する勢力を誇った本願寺は分裂し、弱体化を余儀なくされた』という見方も存在するが、前述の通り本願寺の武装解除も顕如・准如派と教如派の対立も信長・秀吉存命の頃から始まっており、また江戸時代に同一宗派内の本山と脇門跡という関係だった西本願寺と興正寺が、寺格を巡って長らく対立して幕府の介入を招いたことを鑑みれば、教如派が平和的に公然と独立を果たしたことは、むしろ両本願寺の宗政を安定させたとも言える。

入寂

慶長19年10月5日（1614年11月6日 [3]）、57歳で示寂。

分立による本願寺の呼称 [編集]

分立後も、昭和62年（1987年）[13]までは、東西ともに「本願寺」が正式名称である。

分立当初は、教如の「本願寺」を、「信淨院 [14] 本願寺」・「本願寺隠居」・「七条本願寺」・「信門 [15]」と称し、准如の「本願寺」を、「本願寺」・「六条門跡」・「本門」と称した。

のちに教如の「本願寺」は、准如が継承した「（七条堀川の）本願寺」の東に位置するため「東本願寺」と通称され、「（七条堀川の）本願寺」は、相対的に「西本願寺」と通称される。

関連項目 [編集]

ウィキメディア・コモンズには、教如に関連するメディアがあります。

真宗大谷派

東本願寺（正式名称・真宗本廟）

大谷家

真宗大谷派難波別院

脚注 [編集]

1.^ a b 教如…新字体が用いられる以前の文献に用いられた旧字体。

2.^ a b 生年は、ユリウス暦にて表記。

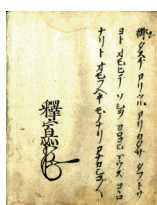
3.^ a b 没年は、グレゴリオ暦にて表記。

4.^ 「元和9年極月16日」と裏書されている。元和9年は、1622年。

5.^ 法主を務めた寺号「本願寺」に諱を付して本願寺光寿（ほんがんに こうじゅ、ほんがんに みつとし）とも称される。この「本願寺」は便宜的に付されたものであって、氏や姓ではない。



- 6.^ 正式には「本願寺」。一般には通称である「東本願寺」と呼称するので、「東本願寺第十二代法主」と表記した。
- 7.^ 信長の目を逸らす為の顕如の策略との説もある。
- 8.^ ただし大坂退去後も、紀伊・美濃・飛騨・越前・越中・安芸・播磨と各地を転々としながら、武田攻めに遠征中の織田軍の後方攪乱を狙って一揆を扇動し、反信長の姿勢を崩していない。(小泉義博の論文などによる)
- 9.^ a b 教如の事。
- 10.^ a b c 顕如の事。
- 11.^ a b 准如の事。
- 12.^ 上場顕雄『教如上人—その生涯と事績—』東本願寺出版部
- 13.^ 昭和 62 年に、本願寺(東本願寺)は、「宗教法人 本願寺」を解散し、真宗大谷派に合併され「真宗本廟」と改称する。
- 14.^ 信淨院…教如の院号。
- 15.^ 信門…信淨院の門跡の意。



宣如上人

慶長 7 年 - 万治元年 7 月 25 日

1602 年 - 1658 年 8 月 23 日

上段・旧暦(宣明暦) 下段・グレゴリオ暦

幼名 長麿 法名 宣如 号 愚溪

院号 東泰院 諱 光従 尊称 如上人

宗旨 浄土真宗 宗派(後の、東本願寺系諸派) 廟 大谷祖廟

関白九条兼孝の猶子となる。

宣如(せんによ)は、江戸時代初期の浄土真宗の僧。東本願寺第十三代法主 [1]。

#### 生涯

年齢は、数え年。日付は文献との整合を保つため、いずれも旧暦(宣明暦)表示を用いる(生歿年月日を除く)。また正式名称は「本願寺」だが、「西本願寺」との区別の便宜上、以下の文中ではとくに断りの無い限り「東本願寺」と表記する。

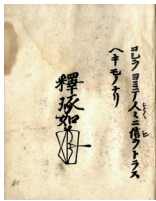
慶長 7 年(1602 年)、東本願寺第十二代 教如の第 12 子(三男)として生まれる。長兄尊如、次兄観如の早世により、法嗣(法主後継者)となる。

慶長 19 年(1614 年)10 月 5 日、教如の示寂により東本願寺を継承し、第十三代となる。

寛永 18 年(1641 年)、徳川家光から寄進された土地に、石川丈山に庭園を作らせ隠居所(現、渉成園)とする。

承応 2 年(1653 年)12 月、退隠し、次男・琢如に法主を譲る。

万治元年 7 月 25 日(1658 年 8 月 23 日)、57 歳にて示寂。



琢如上人

寛永元年 - 寛文 11 年 4 月 14 日

1625 年 - 1671 年 5 月 22 日

上段・旧暦（宣明暦）下段・グレゴリオ暦

幼名 茶々麿 法名 琢如 号 愚玄

院号 淳寧院 諱 光瑛 尊称 琢如上人 宗旨 浄土真宗 宗派（後の、東本願寺系諸派）

廟 大谷祖廟

琢如（たくによ）は、江戸時代初期の浄土真宗の僧。東本願寺第十四代法主 [2]。

学寮（現、大谷大学）の創設、大谷御坊（現、大谷祖廟）の造営と活躍した。

生涯

年齢は、数え年。日付は、暦の正確性、著作との整合を保つ為、旧暦（宣明暦）表示（生歿年月日を除く）とした。また、「本願寺」が正式名称だが、「西本願寺」との区別の便宜上、「東本願寺」と表記した。

寛永元年（1625 年）、東本願寺第十三代 宣如の第 2 子（次男）として誕生。母は九条幸家の娘。のちに伯父九条道房の猶子となる。

寛永 15 年（1639 年）、得度。

承応 2 年（1653 年）、宣如の隠居により第十四代法主を継承。

寛文 5 年（1665 年）、涉成園（大叔父徳川家光より寄進）内に学寮を創設する。

同年 11 月、退隠し、東本願寺法主を長男・常如に譲る。

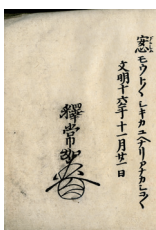
寛文 10 年（1670 年）、東本願寺境内の親鸞及び本願寺歴代の仮墓を、教如・宣如の両墓と共に、本願寺発祥地近くの東山大谷（現、京都市東山区）の地に祖廟を移転し、「大谷御坊」と称し造営に着手する。

寛文 11 年 4 月 14 日（1671 年 5 月 22 日）、47 歳にて示寂。

脚注

1.^ a b c d 「琢」は、「豕」に「丿」を入れた旧字体（「碓」の「石偏」を「王偏」にしたもの）が正式な表記。

2.^ 正式には「本願寺」。一般には通称である「東本願寺」と呼称するので、「東本願寺第十四代法主」と表記した



常如上人

寛永 18 年 - 元禄 7 年 5 月 22 日

1641 年 - 1694 年 6 月 14 日

上段・旧暦（生年宣明暦・没年貞享暦）

下段・グレゴリオ暦

幼名 茶々丸（ささまる）法名 常如

号 愚水 院号 泥洹院 諱 光晴

尊称 常如上人 宗旨 浄土真宗

宗派（後の真宗大谷派）

廟 大谷祖廟

九条幸家の猶子となる。

常如（じょうにょ）は、江戸時代初期の浄土真宗の僧。東本願寺第十五代法主 [1]。

生涯

本ページでは、年齢は、数え年。日付は、暦の正確性、著作との整合を保つため、貞享元年 12 月 30 日（1685 年 2 月 3 日 [2]）までは、宣明暦表示。貞享 2 年 1 月 1 日（1685 年 2 月 4 日）からは、貞享暦表示とする（生歿年月

日を除く)。

寛永 18 年 (1641 年)、東本願寺第十五代 琢如 [3] の長男として誕生。母は近衛信尋の娘。

寛文 4 年 (1664 年) 12 月、琢如の退隠により第十五代法主を継承する。

寛文 7 年 (1667 年)、本堂改築を発願。

寛文 10 年 (1670 年)、本堂落慶。

延宝 6 年 (1678 年)、弟の一如を法嗣 [4] とする。

延宝 7 年 (1679 年)、法主を譲り退隠する。

元禄 7 年 5 月 22 日 (1694 年 6 月 14 日)、54 歳にて示寂。

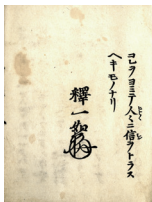
#### 脚注

1.^ 当時の正式名称は「本願寺」(昭和 62 年 <1987 年>以降は、「真宗本廟」が正式名称。詳細は、宗本一体を参照)。  
本願寺派本山の正式名称も「本願寺」(通称、「西本願寺」)であるため、区別するため「東本願寺」と通称されるので、「東本願寺第十五代法主」と表記する。

2.^ 貞享元年 12 月 30 日は、グレゴリオ暦では年が明けて、1685 年 2 月 3 日。

3.^ 「琢」は、「豕」に「丿」を入れた旧字体(「琢」の「石偏」を「王偏」にしたもの)が正式な表記。

4.^ 法嗣…法主後継者のこと。



一如上人

慶安 2 年 - 元禄 13 年 4 月 12 日

1649 年 - 1700 年 5 月 30 日

上段・旧暦(生年宣明暦・没年貞享暦)

下段・グレゴリオ暦

幼名 利與磨 法名 [本瑞寺住職時代] 琢性 [1] [大信寺住職時代] 琢亭 [1]

[法嗣指名後] 一如 号 愚山 院号 [本瑞寺

住職時代] 恩光院⇒無

礙光院

諱 [本瑞寺住職時代] 克海 [大信寺住職時代] 瑛含 [法嗣指名後] 光海

尊称 一如上人 生地 京都 宗旨 浄土真宗 宗派 (後の真宗大谷派)

廟 大谷祖廟

関白近衛基熙の猶子となる。

一如(いちによ)は、江戸時代初期の浄土真宗の僧。東本願寺第十六代法主 [2]。

生涯

本ページでは、年齢は、数え年。日付は、暦の正確性、著作との整合を保つため、貞享元年 12 月 30 日 (1685 年 2 月 3 日 [3]) までは、宣明暦表示。貞享 2 年 1 月 1 日 (1685 年 2 月 4 日) からは、貞享暦表示とする(生歿年月日を除く)。また本山は、「本願寺」が正式名称だが、「西本願寺」との区別の便宜上、「東本願寺」と表記。

慶安 2 年 (1649 年)、東本願寺第十四代 琢如 [1] の第 6 子 (四男) として誕生。母は広橋兼賢の娘。

(年月日不詳) 当初は、福井の「東之御坊 本瑞寺」[4] の住職を務め、院号を「恩光院」、法名を「琢性 [1]」、諱を「克海」と名告る。

(年月日不詳) のちに、河内国 [5] 八尾御坊 大信寺 [6] の住職に転任し、法名を「琢亭 [1]」、諱を「瑛含」と改める。

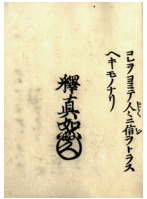
延宝 6 年 (1678 年)、長兄で常如の法嗣(法主後継者)となり、法名を「一如」、諱を「光海」と再度改める。

延宝 7 年 (1679 年)、第十六代法主を継承する。

元禄 13 年 4 月 12 日 (1700 年 5 月 30 日)、52 歳にて示寂。院号を「無礙光院」とする。

#### 脚注

- 1.^ abcde「琢」は、「豕」に「丿」を入れた旧字体（「礪」の「石偏」を「王偏」にしたもの）が正式な表記。
- 2.^ 正式には「本願寺」。一般には通称である「東本願寺」と呼称するので、「東本願寺第十六代法主」と表記。
- 3.^ 貞享元年 12 月 30 日は、グレゴリオ暦では年が明けて、1685 年 2 月 3 日。
- 4.^ 現在の「福井別院 本瑞寺」。
- 5.^ 現在の大阪府の東部。
- 6.^ 現在の「八尾別院 大信寺」。



真如上人（真如 [1]）

天和 2 年 - 延享元年 10 月 2 日

1682 年 - 1744 年 11 月 5 日

上段・旧暦（生年宣明暦・没年貞享暦）

下段・グレゴリオ暦

幼名 光養麿 法名 真如 号 愚海

院号 功德聚院 諱 光性

尊称 真如上人 宗旨 浄土真宗

宗派（後の真宗大谷派）

廟 大谷祖廟

真如(しんにょ、真如 [1])は、江戸時代中期の浄土真宗の僧。東本願寺第十七代法主 [2]。東本願寺第十六代 一如の甥。関白近衛基熙の猶子となる。

#### 生涯

本ページでは、年齢は、数え年。日付は、暦の正確性、著作との整合を保つため、貞享元年 12 月 30 日（1685 年 2 月 3 日 [3]）までは、宣明暦表示。貞享 2 年 1 月 1 日（1685 年 2 月 4 日）からは、貞享暦表示とする（生歿年月日を除く）。また本山は、「本願寺」が正式名称だが、「西本願寺」との区別の便宜上、「東本願寺」と表記。

天和 2 年（1682 年）、東本願寺第十五代 常如の長男として誕生。

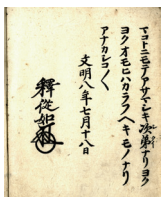
元禄 13 年（1700 年）、一如が示寂し、第十七代法主を継承。

在職中、大谷祖廟の改築や、難波御堂（現、真宗大谷派 難波別院）や山科別院長福寺の再建を遂げ、また、学寮に講師職を設けるなどの功績を残す。

延享元年 10 月 2 日（1744 年 11 月 5 日）、63 歳にて示寂。

#### 脚注

- 1.^ ab 真如…新字体が用いられる以前の文献に用いられた旧字体。
- 2.^ 正式には「本願寺」。一般には通称である「東本願寺」と呼称するので、「東本願寺第十七代法主」と表記。
- 3.^ 貞享元年 12 月 30 日は、グレゴリオ暦では年が明けて、1685 年 2 月 3 日。



従如上人（従如 [1]）

享保 5 年 - 宝暦年 10 年 7 月 11 日

1720 年 - 1760 年 8 月 21 日

上段・旧暦（生年貞享暦・没年宝暦暦）

下段・グレゴリオ暦

幼名 季麿 法名 従如 号 愚川

院号 清浄光院 諱 光超

尊称 従如上人 宗旨 浄土真宗 宗派（後の真宗大谷派） 廟 大谷祖廟

内大臣近衛内前の猶子となる。

従如(じゅうによ、従如 [1])は、江戸時代中期の浄土真宗の僧。東本願寺第十八代法主 [2]。東本願寺第十六代 一如の孫。

#### 生涯

本ページでは、年齢は、数え年。日付は、暦の正確性、著作との整合を保つため、宝暦4年12月30日(1755年2月10日 [3])までは、貞享暦表示。宝暦5年1月1日(1755年2月11日)からは、宝暦暦表示とする(生歿年月日を除く)。また本山は、「本願寺」が正式名称だが、「西本願寺」との区別の便宜上、「東本願寺」と表記。

享保5年(1720年)、一如の四男である海慧を父として誕生。

当初は、奈良の教行寺住職に就く。

(年月日不詳)、一如の甥である第十七代 真如の法嗣 [4] となる。

延享元年(1744年)、真如が示寂し、第十八代法主を継承。

宝暦10年7月11日(1760年8月21日)、41歳で示寂。

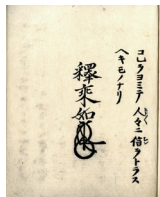
#### 脚注

1.^ a b 従如…新字体が用いられる以前の文献に用いられた旧字体。

2.^ 正式には「本願寺」。一般には通称である「東本願寺」と呼称するので、「東本願寺第十八代法主」と表記。

3.^ 宝暦4年12月30日は、グレゴリオ暦では年が明けて、1755年2月10日。

4.^ 法嗣とは、法主後継者のこと。



乗如

乗如 (乗如 [1])

延享元年 - 寛政4年2月22日

1744年 - 1792年3月14日

上段・旧暦 (貞享暦) 下段・グレゴリオ暦

幼名 悦丸⇒光養丸

法名 乗如

号 愚船

院号 歡喜光院

諱 光遍

尊称 乗如上人

宗旨 浄土真宗

宗派 (後の真宗大谷派)

廟 大谷祖廟

乗如(じょうによ、乗如 [1])は、江戸時代中期の浄土真宗の僧。東本願寺第十九代法主 [2]。

#### 経歴 [編集]

本ページでは、年齢は、数え年。日付は、暦の正確性、著作との整合を保つため、貞享2年(1685年 [3])から、宝暦4年12月30日(1755年2月10日)までは、貞享暦表示。宝暦5年(1755年)からは、宝暦暦表示とする(歿年月日を除く)。また本山は、「本願寺」が正式名称だが、「西本願寺」との区別の便宜上、「東本願寺」と表記。

延享元年(1744年)、東本願寺第十七代 真如の第8子(五男)として誕生。

(年月日不詳)第十八代法主・従如の法嗣(法主後継者)となる。

宝暦10年(1760年)7月、従如の示寂により、第十九代法主を継承。

天明8年(1788年)、いわゆる「天明の京都大火」により本堂を焼失。

同年11月、大信寺(八尾御坊) [4]の本堂を移築し、仮御影堂とする。 [5]

寛政元年(1789年)3月、本堂再建に着手する(「手斧始」がおこなわれる)。



本堂完成は、歿後の寛政10年（1798年）。

寛政4年2月22日（1792年3月14日）、49歳にて示寂。

脚注 [編集]

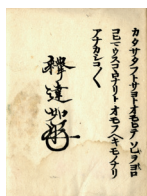
^ a b 乗如…新字体が用いられる以前の文献に用いられた旧字体。

^ 正式には「本願寺」。一般には通称である「東本願寺」と呼称するので、「東本願寺第十九代法主」と表記。

^ グレゴリオ暦。

^ 大信寺（八尾御坊）は、後の、「別院大信寺」。現、「真宗大谷派 八尾別院」。

^ 寛政11年（1799年）、仮御堂として用いられた堂宇は、大信寺に再移築される。



達如上人（達如 [1]）

安永9年 - 慶応元年 11月4日

1780年 - 1865年 12月21日

上段・旧暦（宝暦暦）下段・グレゴリオ暦

幼名 説丸（あきまる）⇒光養丸

法名 達如 号 愚泉 院号 無上覺院 諱 光朗 尊称 達如上人

宗旨 浄土真宗 宗派（後の真宗大谷派） 廟 大谷祖廟

前摂政近衛内前の猶子となる。

達如（たつによ、達如 [1]）は、江戸時代後期の浄土真宗の僧。東本願寺第二十代法主 [2]。

経歴

本ページでは、年齢は、数え年。日付は、暦の正確性、著作との整合を保つ為、寛政9年（1797年 [3]）までは、宝暦暦表示。寛政10年（1798年）から、天保14年12月29日（1844年2月17日）までは、寛政暦表示。天保15年1月1日（1844年2月18日）からは、天保暦表示とする（歿年月日を除く）。また本山は、「本願寺」が正式名称だが、「西本願寺」との区別の便宜上、「東本願寺」と表記。

安永9年（1780年）、第十九代法主 乗如の子として誕生。

寛政4年（1792年）2月19日、得度。

同年2月22日、父・乗如の示寂にともない、第二十代法主を継承。寛政10年（1798年）、「天明の京都大火」（天明8年〈1788年〉）により焼失した東本願寺・本堂が落成する。

文政6年（1823年）11月、本堂、再焼失。

文政8年（1825年）、本堂・再建を発願。

天保6年（1835年）3月、落成。

弘化3年（1846年）、次男・嚴如（大谷光勝）に法主を委譲、涉成園に退隠する。

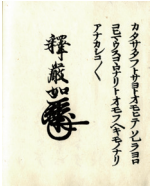
慶応元年11月4日（1865年12月21日 [3]）、86歳にて示寂。

脚注

1.^ a b 達如…新字体が用いられる以前の文献に用いられた旧字体。

2.^ 正式には「本願寺」。一般には通称である「東本願寺」と呼称するので、「東本願寺第二十代法主」と表記。

3.^ a b グレゴリオ暦。



大谷光勝（嚴如 [1]）

文化 14 年 3 月 7 日 - 明治 27 年 1 月 15 日

1817 年 4 月 22 日 - 1894 年 1 月 15 日

上段・旧暦（寛政暦）下段・グレゴリオ暦

幼名 豫丸（かねまる）

法名 達住⇒嚴如（ごんにょ）号 愚臯（ぐこう）院号 靈心院⇒眞無量院 諱 朗澄⇒光勝

尊称 嚴如上人 宗旨 浄土真宗 宗派 真宗大谷派 廟 大谷祖廟

内大臣近衛忠熙の猶子となる。

大谷 光勝（おおたに こうしょう）は、江戸時代後期から明治時代にかけての浄土真宗の僧。法名は、「嚴如 [1]」（ごんにょ）。東本願寺第二十一代法主 [2]。真宗大谷派管長。伯爵。

## 生涯

本ページでは、年齢は、数え年。日付は、暦の正確性、著作との整合を保つ為、天保 14 年 12 月 29 日（1844 年 2 月 17 日 [3]）までは、寛政暦表示。天保 15 年 1 月 1 日（1844 年 2 月 18 日）から明治 5 年 12 月 2 日（1872 年 12 月 31 日）までは、天保暦表示。明治 6 年 1 月 1 日（1873 年 1 月 1 日）からは、グレゴリオ暦表示とする（誕生年月日を除く）。また本山は、「本願寺」が正式名称だが、「西本願寺」との区別の便宜上、「東本願寺」と表記。

文化 14 年 3 月 7 日（1817 年 4 月 22 日 [3]）、東本願寺第二十代 達如の次男として誕生。近衛忠熙の猶子となる。

文政 6 年（1823 年）、東本願寺、両堂宇を焼失する。

文政 7 年（1824 年）、東本願寺、仮堂宇を立てる。

文政 11 年（1828 年）3 月 18 日、得度する。院号を「靈心院」、法名を「達住」、諱を「朗澄」と名乗る。長浜別院大通寺と姫路別院本徳寺の住職を兼職する。天保 12 年（1841 年）4 月 6 日、法嗣（法主後継者）である長兄・寶如が逝去。

同年 12 月 10 日、寶如の逝去により法嗣となる。法名を「嚴如 [1]」と改める。

弘化 3 年（1846 年）5 月 22 日、父・達如が隠退により、第二十一代法主を継承する。

嘉永元年（1848 年）12 月 16 日には、伏見宮邦家親王の四女・嘉枝宮和子女王を室に迎える。元治元年（1864 年）、禁門の変により仮堂宇が消失する。

明治元年（1868 年）、近代に入ると、親密であった東本願寺と江戸幕府との関係を払拭し、明治新政府との関係改善を図るため、勤皇の立場を明確にする。そのため、北陸や東海地方へ巡教・勧募し、軍事費 1 万両・米 4 千俵を政府に献上する。

明治 2 年（1869 年）、政府の北海道開拓事業を請け負うことを決定する。

明治 3 年（1870 年）、法嗣である第 5 子（四男）・現如（大谷光瑩）を北海道に派遣した。（⇒詳しくは「本願寺道路」の項を参照）

明治 5 年（1872 年）3 月、華族に列せられる。

同年 9 月、名字必称となり「大谷」の名字（姓）を用いる。

明治 12 年（1879 年）、焼失した東本願寺の両堂宇の再建を発願し、再建工事の着工を表明する。

明治 14 年（1881 年）、宗教団体法の規定により、宗派名が「真宗大谷派」と定まる。

明治 22 年（1889 年）、現如に法主を譲り退隠する。法在職期間は、43 年。院号を「眞無量院」とする。

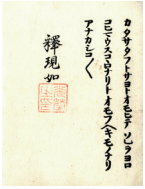
明治 27 年（1894 年）1 月 15 日、78 歳にて示寂。

## 脚注 [編集]

1.^ a b c 嚴如…旧字体が正式表記。「嚴如」と新字体で表記する場合もある。

2.^ 正式には「本願寺」。一般には通称である「東本願寺」と呼称するので、「東本願寺第二十一代法主」と表記。

3.^ a b グレゴリオ暦。



大谷光瑩（現如）

嘉永5年7月27日 [1] (1852年9月10日 [2]) -  
大正12年 (1923年) 2月8日 [2]

Koei Otani.jpg

幼名 光養磨 法名 現如 号 愚邱  
院号 莊嚴光院 諱 光瑩 尊称 現如上人  
没地 東京都千代田区霞が関  
宗旨 浄土真宗 宗派 真宗大谷派  
廟 大谷祖廟、北海御廟  
近衛忠熙の猶子となる。

大谷 光瑩（おおたに こうえい）は、明治から大正時代にかけての浄土真宗の僧。法名は「現如」（げんにょ）。東本願寺第二十二代法主 [3]。真宗大谷派管長。伯爵。

### 生涯

日付は、暦の正確性、著作との整合を保つ為、明治5年12月2日（1872年12月31日）までは、天保暦表示。明治6年1月1日(1873年1月1日 [2])からは、グレゴリオ暦表示とする（誕生年月日を除く）。また本山は、「本願寺」が正式名称だが、「西本願寺」との区別の便宜上、「東本願寺」と表記。

嘉永5年（1852年）7月27日、東本願寺第二十一代 嚴如（大谷光勝）の第五子（四男）として誕生。

明治3年（1870年）2月10日、東本願寺が明治新政府から請け負った北海道開拓事業の責任者として、百数十名の随員を従えて北海道へ渡る。その道中は、教化をしながら工事費などの寄付を募り、また北海道への移民勧誘をおこなう。

同年7月7日、函館に到着する。本願寺道路の建設など開拓を指示し、札幌へ向かい朝廷より下賜された土地を視察する。

明治4年（1871年）9月、その地に布教の拠点として、その地に東本願寺管刹（寺）を建設する。明治9年（1876年）、その官刹を東本願寺札幌別院と改称する。

明治5年（1872年）9月から翌年7月にかけて、ヨーロッパ各国を歴訪し宗教事情を視察、教団の近代化に寄与した。明治22年（1889年）10月7日、父・嚴如（ごんにょ）の隠退により、第二十二代法主に就任。明治28年（1895年）4月、東本願寺両堂竣工。

明治29年（1896年）6月、北海道開拓事業の功績を受け、伯爵号を授かる。

明治34年（1901年）5月、遊蕩ぶりが宮武外骨の「滑稽新聞」上で風刺の対象となる [4]。

明治41年（1908年）11月、第2子・彰如（大谷光演）に法主を委譲し、退隠する。院号を「莊嚴光院」とする。

大正12年（1923年）2月8日、東京霞が関の別邸にて示寂。享年72[5]（満70歳没）。

昭和9年（1934年）札幌市の北海御廟に分骨される。

### 脚注 [編集]

1.^ 天保暦。

2.^ abc グレゴリオ暦。

3.^ 正式には「本願寺」。一般には通称である「東本願寺」と呼称するので、「東本願寺第二十二代法主」と表記。

4.^ 赤瀬川原平、吉野孝雄編 『宮武外骨・滑稽新聞 第壹冊』 筑摩書房、1985年、66頁、ISBN 9784480355010

5.^ 数え年。



大谷光演（彰如）

1875年（明治8年）2月27日 -

1943年（昭和18年）2月6日）

幼名 光養磨 法名 彰如

号 愚峯（ぐほう）〔俳号〕句仏（くぶつ）

院号 無量光院 諱 光演

尊称 彰如上人、句仏上人

宗旨 浄土真宗 宗派 真宗大谷派

著作

『夢の跡』『我は我』『句仏句集』

（いずれも句集）

廟 大谷祖廟

大谷光演（おおたに こうえん）は、明治から大正時代にかけての浄土真宗の僧。法名は「彰如」（しょうにょ）。東本願寺第二十三代法主 [1]。真宗大谷派管長。俳人。伯爵。

妻は、三条実美の三女・章子。

1900年まで南条文雄・村上専精・井上円了らについて修学。また幸野楳嶺や竹内栖鳳に日本画を学び、さらに正岡子規の影響を受け、『ホトトギス』誌にて河東碧梧桐、高浜虚子らに選評してもらい、彼らに傾倒して師と仰いだ。後に『ホトトギス』誌の影響から脱し独自の道を歩む。生涯に多くの俳句（約2万句）を残し、文化人としての才能を発揮、日本俳壇界に独自の境地を開いた。「句仏上人」（「句を以って仏徳を讃嘆す」の意）として親しまれる。

1901年に札幌で宗教系の学校が北星女子学校しか無い事を知り仏教系の女子学校を思い立つが、資金調達に難航し1902年（明治35年）に北海道庁立札幌高等女学校を開設するには至らなかったが、4年後の1906年4月に北海女学校を開校に漕ぎつけた。

目次 [非表示]

1 生涯

2 関連項目

3 著書

4 脚注

5 参考文献

生涯

本山は「本願寺」が正式名称だが、「西本願寺」との区別の便宜上、「東本願寺」と表記。

1875年（明治8年）2月27日、東本願寺第二十二代法主 現如の次男として誕生。

1885年（明治18年）、得度。

1900年（明治33年）5月仏骨奉迎正使としてタイを訪問

1901年（明治34年）真宗大谷派副管長

1906年（明治39年）札幌で仏教主義の女子学校として北海女学校を開校。

1908年（明治41年）11月、退隠した父・光瑩より第二十三代法主を継承し、真宗大谷派管長となる。

1911年（明治44年）、宗祖親鸞聖人六百五十回御遠忌法要を厳修。

1925年（大正14年）、朝鮮半島における鉱山事業の失敗から、東本願寺の財政を混乱させ引責・退隠し、長男の闡如に法主を譲る。

1943年（昭和18年）2月6日、68歳にて示寂。

#### 関連項目

清沢満之 近角常観 佐々木月樵 暁鳥敏

#### 著書 [編集]

『句仏句集』読売新聞社、1959年。

『俳諧歳時記 新年』共著、改造社、1948年。

『我は我』書物展望社、1938年。

『夢の跡』政経書院、1935年。

『この大災に遇うて』中外出版、1923年。

『法悦の一境』内田疎天編広文堂、1920年。

安部自得編『句仏上人俳句頂戴鈔』、法藏館、1910年。

『自然のままに』真宗大谷派宗務所出版部、1992年。



大谷光暢（闡如）

1903年（明治36年）10月1日 -

1993年（平成5年）4月13日

幼名 光養麿 法名 闡如 号 愚郊

院号 諦聴音院 諱 光暢

尊称 闡如上人 宗旨 浄土真宗

宗派 真宗大谷派

大谷 光暢（おおたに こうちょう）は、明治時代から昭和時代にかけての浄土真宗の僧。法名は「闡如」（せんによ）。東本願寺第二十四代法主 [1]。（のちに門首。）真宗大谷派管長。伯爵。昭和天皇の義弟にあたる。

#### 生涯

1987年（昭和62年）までは、「本願寺」が本山の正式名称だが、本項では「西本願寺」との区別の便宜上、「東本願寺」と表記する。 [2]

1903年（明治36年）10月1日、東本願寺第二十三代 彰如の長男として誕生。

1924年（大正13年）5月3日、大谷大学在学中に久邇宮邦彦王の三女で香淳皇后の妹にあたる智子女王と婚姻。

1925年（大正14年）9月、財政問題の責を負って退任した、父・光演の後を受けて第二十四代法主に就任。

1947年（昭和22年）、妻・智子裏方とともに合唱団「大谷楽苑」を結成する。仏教音楽を用いた教化を推進するなど活躍する。

1949年（昭和24年）、蓮如上人四百五十回御遠忌法要を厳修。

1961年（昭和36年）、宗祖親鸞聖人七百回御遠忌法要を厳修。

1969年（昭和44年）4月、「私が兼務している法主・本願寺住職・管長のうち、管長職だけを長男光紹新門に譲る」と発表する（開申事件）。開申事件を契機に、教義解釈や宗派運営の方針、財産問題等を巡り、改革派が主導する真宗大谷派内局と対立（お東騒動を参照）。

1981年（昭和56年）6月、光暢を支持する者も少なくなかったが、内局との紛争に敗れ、「真宗大谷派宗憲（宗派



の憲法にあたる法規」が改正され、自身の地位が、宗祖親鸞以来の法統を継承する教団の指導者という絶対的「法主」から、教団全ての僧侶・門徒の代表という実権を持たない象徴的「門首」へと移行される。

教団の主導権を失った後も光暢は、本願寺の伝統に反する行為として、これらの動きを一貫して認めず、門首制以降後は、公式な場に姿を見せることはほとんど無くなる。

1987年(昭和62年)、内局は、宗教法人「本願寺」を法的に解散し、宗教法人「真宗大谷派」に一体化する(宗本一体化)。「本願寺」(通称「東本願寺」)の正式名称は、「真宗本廟」(しんしゅうほんびょう)となる。

1993年(平成5年)4月13日、89歳で示寂。法主(門首)在職期間、67年。

光暢の没後、大谷派は門首不在となる。その間は、大谷演慧(えんねい)鍵役が、門首代行を務める。1996年(平成8年)、三男の大谷暢顯(浄如)が、継承し真宗大谷派第二十五代門首となる。

#### 子女 [編集]

妻：智子女王(久邇宮邦彦王三女) 大谷光紹(法名：興如。浄土真宗東本願寺派第二十五世法主)

大谷暢順(東山上花山本願寺第25代門主・大谷光輪の父)

大谷暢顯(法名：浄如。真宗大谷派第二十五代門首)

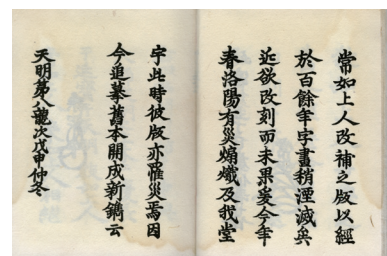
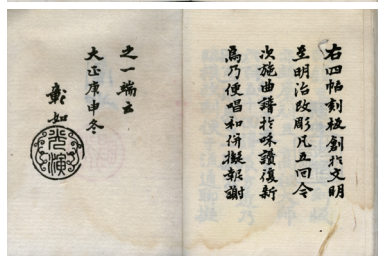
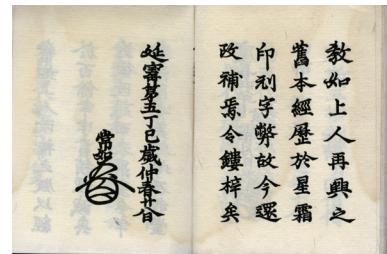
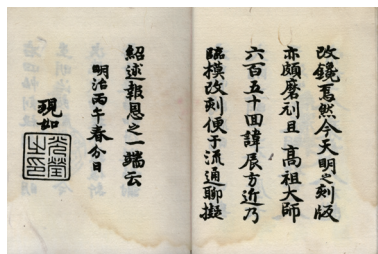
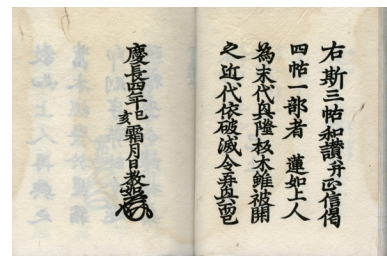
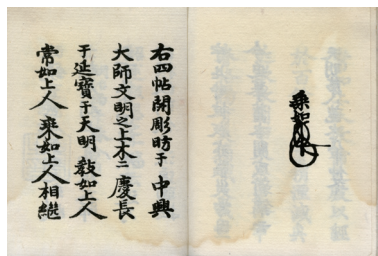
大谷暢道(のち大谷光道に改名。法名：秀如。嵯峨野本願寺第二十五代)

#### 脚注 [編集]

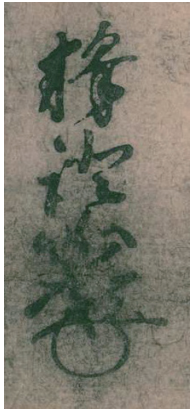
1.^ 1987年(昭和62年)まで正式には「本願寺」。一般には通称である「東本願寺」と呼称するので、「東本願寺第二十四代法主」と表記した。

2.^ それ以降の正式名称は「真宗本廟」と改称される。通称の「東本願寺」は、そのまま用いられている。

三帖和讃の正像末和讃の裏書きには、このように書かれています。



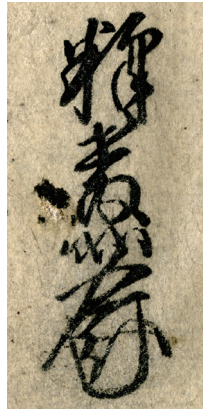
證如上人からの花押



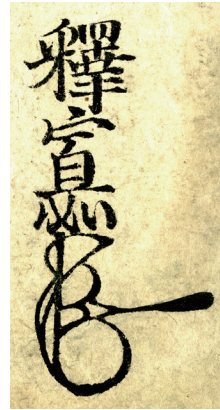
第10代  
證如上人



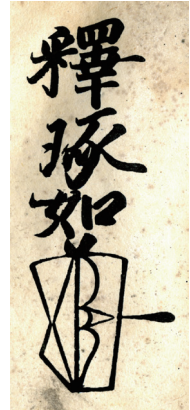
第11代  
顯如上人



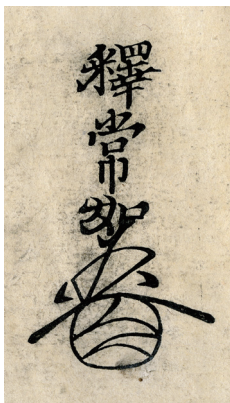
第12代  
教如上人



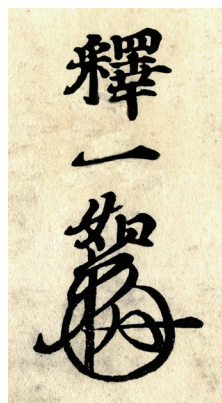
第13代  
宣如上人



第14代  
琢如上人



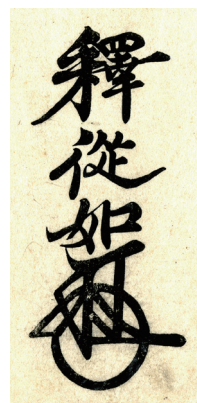
第15代  
常如上人



第16代  
一如上人



第17代  
真如上人



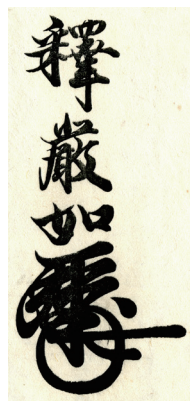
第18代  
從如上人



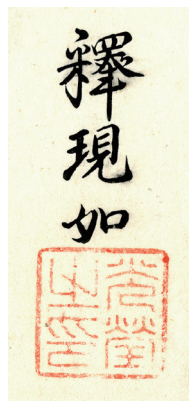
第19代  
乘如上人



第20代  
達如上人



第21代  
嚴如上人



第22代  
現如上人

第23代  
彰如上人

第24代  
闡如上人



未代无智ノ在家止住ノ男女タラシ  
 トモカラハコロラヒトツニテ阿弥陀佛ヲ  
 フカクタノミテイラセテサラニ餘ノカクハ  
 コロラフラス一心一向ニ佛タケタヘト  
 イウサシ衆生ヲハタトヒ罪業ハ深重  
 ナリトモカテラス称陀如来ハスラロトシテス  
 ヘシコスナチ弟十八ノ念佛往生ノ擔願ノ

第 11 代  
顯如上人

未代无智ノ在家止住ノ男女タラシ  
 トモカラハコロラヒトツニテ阿弥陀佛ヲ  
 フカクタノミテイラセテサラニ餘ノカクハ  
 コロラフラス一心一向ニ佛タケタヘト  
 イウサシ衆生ヲハタトヒ罪業ハ深重  
 ナリトモカテラス称陀如来ハスラロトシテス  
 ヘシコスナチ弟十八ノ念佛往生ノ擔願ノ

第 12 代  
教如上人

未代无智ノ在家止住ノ男女タラシ  
 トモカラハコロラヒトツニテ阿弥陀佛ヲ  
 フカクタノミテイラセテサラニ餘ノカクハ  
 コロラフラス一心一向ニ佛タケタヘト  
 イウサシ衆生ヲハタトヒ罪業ハ深重  
 ナリトモカテラス称陀如来ハスラロトシテス  
 ヘシコスナチ弟十八ノ念佛往生ノ擔願ノ

第 13 代  
宣如上人

未代无智ノ在家止住ノ男女タラシ  
 トモカラハコロラヒトツニテ阿弥陀佛ヲ  
 フカクタノミテイラセテサラニ餘ノカクハ  
 コロラフラス一心一向ニ佛タケタヘト  
 イウサシ衆生ヲハタトヒ罪業ハ深重  
 ナリトモカテラス称陀如来ハスラロトシテス  
 ヘシコスナチ弟十八ノ念佛往生ノ擔願ノ

第 13 代  
宣如上人



未代无智ノ在家止住ノ男女タラシ  
 トモカラハコロラヒトツミテ阿弥陀佛ヲ  
 フカクタノミイラセテサラニ餘ノカトヘ  
 コロラフラス一心一向ニ佛タヌケタヘト  
 コウサン衆生ヲハタトヒ罪業ハ深重  
 ナリトモカナラス弥陀如来ハスクヒシニス  
 へシコリスナチ弟十八ノ念佛往生擔願ノ

第 15 代  
常如上人

未代无智ノ在家止住ノ男女タラシ  
 トモカラハコロラヒトツミテ阿弥陀佛ヲ  
 フカクタノミイラセテサラニ餘ノカトヘ  
 コロラフラス一心一向ニ佛タヌケタヘト  
 コウサン衆生ヲハタトヒ罪業ハ深重  
 ナリトモカナラス弥陀如来ハスクヒシニス  
 へシコリスナチ弟十八ノ念佛往生擔願ノ

第 16 代  
一如上人

未代无智ノ在家止住ノ男女タラシ  
 トモカラハコロラヒトツミテ阿弥陀佛ヲ  
 フカクタノミイラセテサラニ餘ノカトヘ  
 コロラフラス一心一向ニ佛タヌケタヘト  
 コウサン衆生ヲハタトヒ罪業ハ深重  
 ナリトモカナラス弥陀如来ハスクヒシニス  
 へシコリスナチ弟十八ノ念佛往生擔願ノ

第 17 代  
真如上人

未代无智ノ在家止住ノ男女タラシ  
 トモカラハコロラヒトツミテ阿弥陀佛ヲ  
 フカクタノミイラセテサラニ餘ノカトヘ  
 コロラフラス一心一向ニ佛タヌケタヘト  
 コウサン衆生ヲハタトヒ罪業ハ深重  
 ナリトモカナラス弥陀如来ハスクヒシニス  
 へシコリスナチ弟十八ノ念佛往生擔願ノ

第 18 代  
従如上人

末代无智ノ在家止住ノ男女多クシ  
 トモカラハコロラヒトツミテ阿弥陀佛ヲ  
 フカクタクミイラセテサラニ餘カクハ  
 コロラフラス一心一向ニ佛タテタミト  
 ニウサシ衆生ヲハタトヒ罪業ハ深重  
 ナリトモカナラス弥陀如来ハスクヒシニ  
 ヘシコスナチ第十八ノ念佛往生ヲ擔願ノ

第 19 代  
乘如上人

末代无智ノ在家止住ノ男女多クシ  
 トモカラハコロラヒトツミテ阿弥陀佛ヲ  
 フカクタクミイラセテサラニ餘カクハ  
 コロラフラス一心一向ニ佛タテタミト  
 ニウサシ衆生ヲハタトヒ罪業ハ深重  
 ナリトモカナラス弥陀如来ハスクヒシニ  
 ヘシコスナチ第十八ノ念佛往生ヲ擔願ノ

第 20 代  
達如上人

末代无智ノ在家止住ノ男女多クシ  
 トモカラハコロラヒトツミテ阿弥陀佛ヲ  
 フカクタクミイラセテサラニ餘カクハ  
 コロラフラス一心一向ニ佛タテタミト  
 ニウサシ衆生ヲハタトヒ罪業ハ深重  
 ナリトモカナラス弥陀如来ハスクヒシニ  
 ヘシコスナチ第十八ノ念佛往生ヲ擔願ノ

第 21 代  
徹如上人

末代无智ノ在家止住ノ男女多クシ  
 トモカラハコロラヒトツミテ阿弥陀佛ヲ  
 フカクタクミイラセテサラニ餘カクハ  
 コロラフラス一心一向ニ佛タテタミト  
 ニウサシ衆生ヲハタトヒ罪業ハ深重  
 ナリトモカナラス弥陀如来ハスクヒシニ  
 ヘシコスナチ第十八ノ念佛往生ヲ擔願ノ

第 22 代  
現如上人

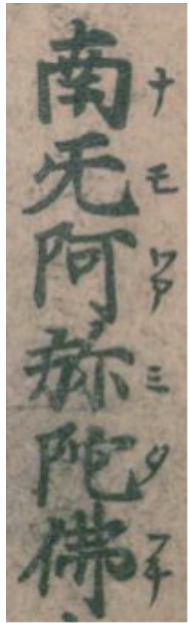


丈真宗念佛行者ノナカニシテ  
 法義ニツイテソノコトナキ次第己  
 オホコシガルルヒタ大概ソノラモキシ  
 プラハミシハリ又所詮自今已後ハ  
 同心ノ行者ハヨクハシモテ本トス  
 へニヨヒツイテフタツノコトアリ一ニハ  
 自身ノ往生スヘキ安心ヲ以テ治定スヘキ

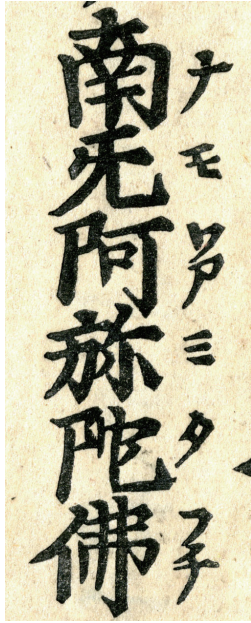
第 10 代  
證如上人

抑當流ニシテ其名ハカリヲカケシ  
 トモカラモ又モトヨリ門徒タラシ人モ  
 安心ノトホリヲヨクコトエスハアヒ  
 カテ今自ヨリニテ他カノ大信心ノ  
 シモキヲ子ニヨヒ人ニアヒタツテ  
 報五往生ヲ決定セムキナリ丈一流ノ  
 安心ヲトイトイフモ何ノヤウモナク

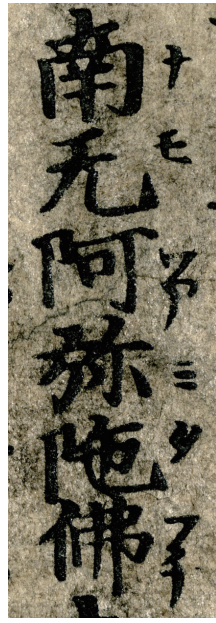
第 14 代  
琢如上人



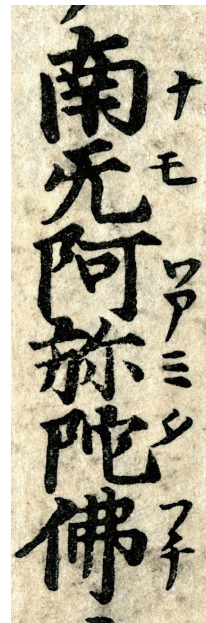
第10代  
證如上人



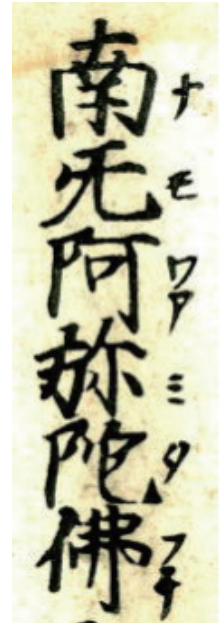
第11代  
顯如上人



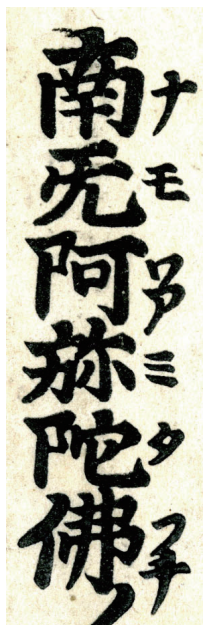
第12代  
教如上人



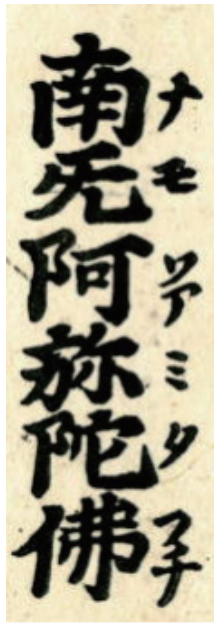
第12代  
教如上人



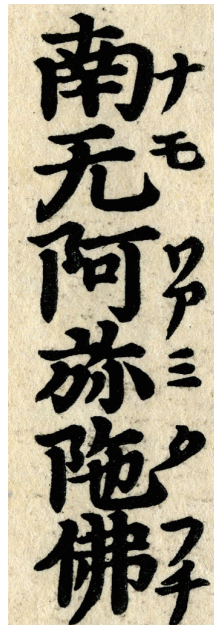
第13代  
宣如上人



第13代  
宣如上人



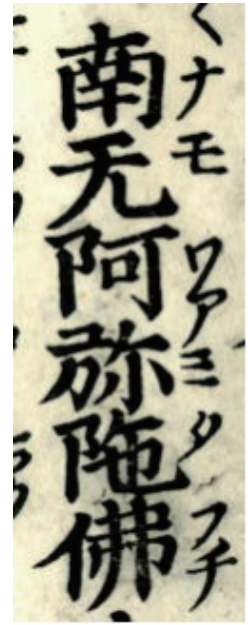
第14代  
琢如上人



第15代  
常如上人

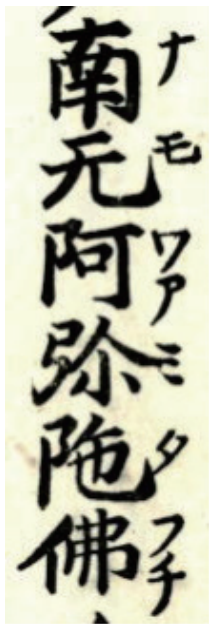


第16代  
一如上人



第17代  
真如上人

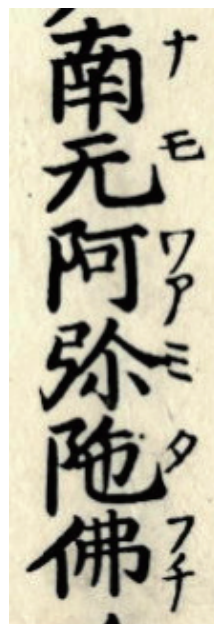




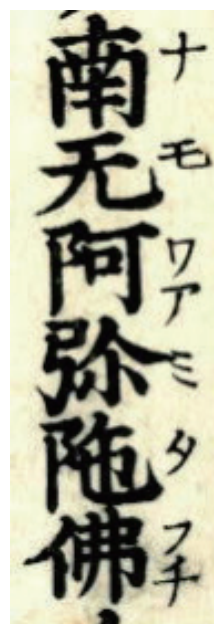
第17代  
真如上人



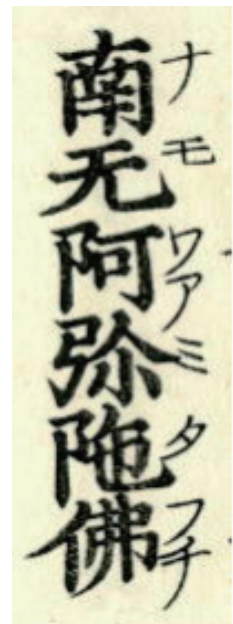
第18代  
従如上人



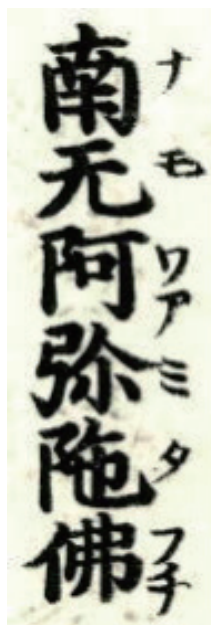
第19代  
乗如上人



第20代  
達如上人



第21代  
厳如上人

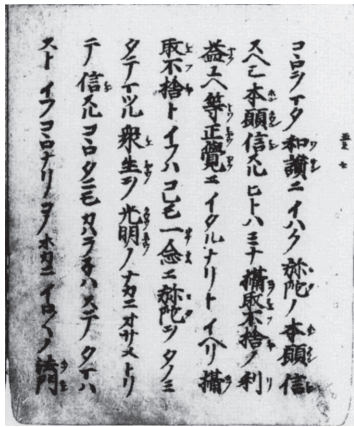


第22代  
現如上人

南無阿弥陀仏の字を比較すると、无の字を使用し、無のじは使用していない。无に点があるものと無いものがある。親鸞聖人の无には点がある。「彌」「陀」の字にも時代とともに変化が見られる。古い御文の合本では、同じ時に製作されたか疑問が持たれる。

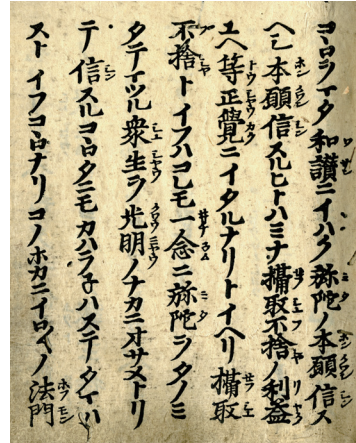
御文の字配りについて

御文の字配りについて、なじみの深い五帖目を見ていきたいと思います。證如上人の御文は、『実如判 五帖御文の研究 資料編』を参照します。五帖目の御文を見ますと、證如上人の御文と顯如上人の御文違いは、6通「一念に弥陀をたのみたてまつる行者には、」の箇所、4枚目御文 1行目「本願信ス」 2行目「利益」 3行目「摂取」の字配りが異なっています。国家有図書館デジタル版顯如上人の御文も同様になっています。 この箇所が最初期の変更箇所と思われます。



第10代  
證如上人

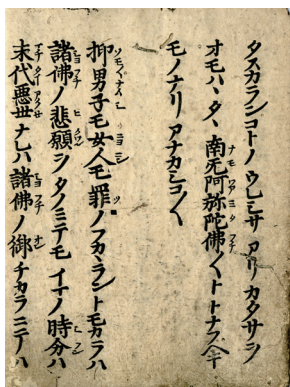
このころをまた和讃にいはいはく 弥陀の本願信  
ずべし 本願信ずるひとはみな 摂取不捨の利  
益ゆゑ 等正覚にいたるなりといへり。摂  
取不捨といふはこれも一念に弥陀をたのみ



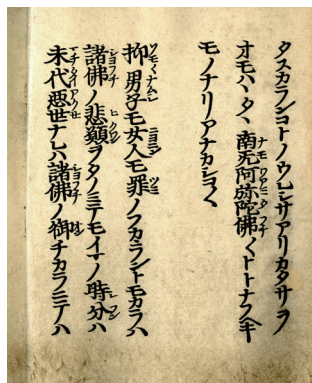
第11代  
顯如上人

このころをまた和讃にいはいはく 弥陀の本願信ず  
べし 本願信ずるひとはみな 摂取不捨の利益  
ゆゑ 等正覚にいたるなりといへり。摂取  
不捨といふはこれも一念に弥陀をたのみ

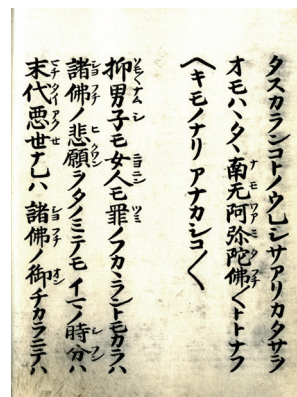
それでは、五帖目の御文に沿って見ていきます。  
3通「それ、在家の尼女房たらん身は」の末 六頁3



第11代  
顯如上人



第16代  
一如上人



第17代  
真如上人

たすからんことのうれしさありがたさを  
おもは、た、南無阿弥陀仏くくととなふ  
へきものなり。あなかしこく

たすからんことのうれしさありがたさを  
おもは、た、南無阿弥陀仏くくととなふ  
へきものなり。あなかしこく



コノウハナラククタフクオモタテ  
ツランコノヲヨシ時ハ南无阿弥陀佛  
ト時ラモイハストヨラモキラス念佛  
申ヘシヨラズキチ佛恩報謝ノ念佛ト  
申ナリアナカシク

信シヨモ獲ウケ得タスキイハシ弟ケ十シ八ハチ願ガネラシヨシル

第 11代  
顯如上人

コノウハナラククタフクオモタテ  
ツランコノヲヨシ時ハ南无阿弥陀佛  
ト時ラモイハストヨラモキラス念佛  
申ヘシヨラズキチ佛恩報謝ノ念佛ト  
申ナリアナカシク

信シヨモ獲ウケ得タスキイハシ弟ケ十シ八ハチ願ガネラシヨシル

第 16代  
一如上人

コノウハナラククタフクオモタテ  
ツランコノヲヨシ時ハ南无阿弥陀佛  
ト時ラモイハストヨラモキラス念佛  
申ヘシヨラズキチ佛恩報謝ノ念佛ト  
申ナリアナカシク

信シヨモ獲ウケ得タスキイハシ弟ケ十シ八ハチ願ガネラシヨシル

第 17代  
真如上人

このうへには、なほなほたふとくおもひたて  
まつらんところのおころんときは、

このうへには、なほなほたふとくおもひたてまつ  
らんところのおころんときは、

イリテウツクキホトケトハナルキ  
ナリサテコノウハナラククヤウハ  
トキク念佛ヲイハシテカルアキキ  
ワシラヤククサテハニエス阿弥陀如来  
御恩ヲ御ウレシサカリカサヲ報セ  
タニ念佛トウズキハカリナリトヨロウ  
ヘキモノナリアナカシク

第 11代  
顯如上人

イリテウツクキホトケトハナルキ  
ナリサテコノウハナラククヤウハ  
トキク念佛ヲイハシテカルアキキ  
ワシラヤククサテハニエス阿弥陀如来  
御恩ヲ御ウレシサカリカサヲ報セ  
タニ念佛トウズキハカリナリトヨロウ  
ヘキモノナリアナカシク

第 15代  
常如上人

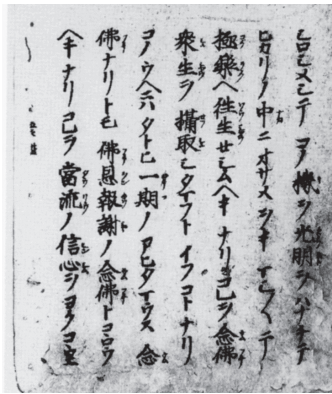
イリテウツクキホトケトハナルキ  
ナリサテコノウハナラククヤウハ  
トキク念佛ヲイハシテカルアキキ  
ワシラヤククサテハニエス阿弥陀如来  
御恩ヲ御ウレシサカリカサヲ報セ  
タニ念佛トウズキハカリナリトヨロウ  
ヘキモノナリアナカシク

第 16代  
一如上人

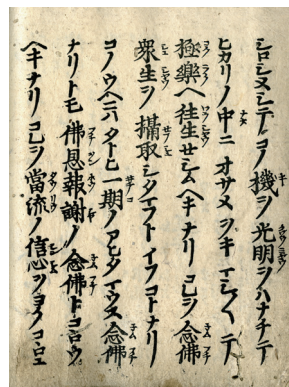
たすけまします阿弥陀如来の  
御恩を御うれしさありがたさ

たすけまします阿弥陀如来の  
御恩の御うれしさありがたさ

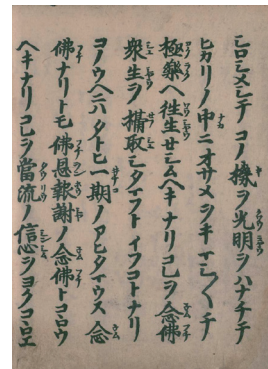


A page of handwritten Japanese text in a vertical column. The characters are in a traditional cursive style (sōsho). The text is dense and covers most of the page.

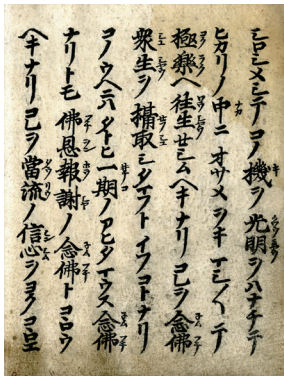
第10代  
證如上人

A page of handwritten Japanese text in a vertical column. The characters are in a traditional cursive style. The text is dense and covers most of the page.

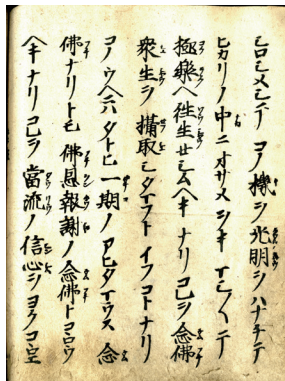
第11代  
顯如上人

A page of handwritten Japanese text in a vertical column. The characters are in a traditional cursive style. The text is dense and covers most of the page.

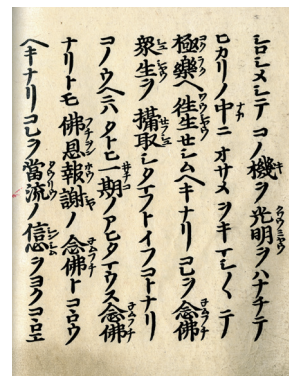
第11代  
顯如上人  
デジタル版

A page of handwritten Japanese text in a vertical column. The characters are in a traditional cursive style. The text is dense and covers most of the page.

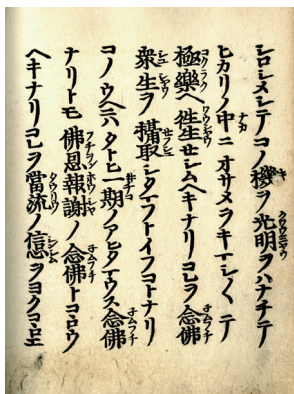
第12代  
教如上人

A page of handwritten Japanese text in a vertical column. The characters are in a traditional cursive style. The text is dense and covers most of the page.

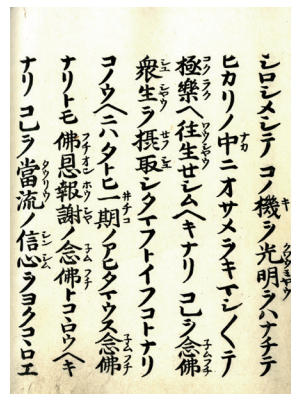
第13代  
宣如上人

A page of handwritten Japanese text in a vertical column. The characters are in a traditional cursive style. The text is dense and covers most of the page.

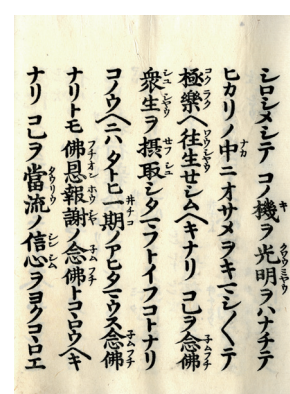
第15代  
常如上人

A page of handwritten Japanese text in a vertical column. The characters are in a traditional cursive style. The text is dense and covers most of the page.

第16代  
一如上人

A page of handwritten Japanese text in a vertical column. The characters are in a traditional cursive style. The text is dense and covers most of the page.

第17代  
真如上人

A page of handwritten Japanese text in a vertical column. The characters are in a traditional cursive style. The text is dense and covers most of the page.

第21代  
徹如上人



又ハタ、白骨ノミソノコリアトイモ  
中クヲ另ナリサハ人間ノカチキ  
事ハ老少不定ノサカセハシノモ  
ハヤク 後生ノ一大事ヲ心ニカケテ  
阿弥陀佛ヲフカクタクミテイラセテ  
念佛ヲウスキモノナリアナカシク

第11代  
顯如上人

又ハタ、白骨ノミソノコリアトイモ  
中クヲ另ナリサハ人間ノカチキ  
事ハ老少不定ノサカセハシノモ  
ハヤク 後生ノ一大事ヲ心ニカケテ  
阿弥陀佛ヲフカクタクミテイラセテ  
念佛ヲウスキモノナリアナカシク

第16代  
一如上人

又ハタ、白骨ノミソノコリアトイモ  
イフモ中クヲカナリサハ人間ノカ  
チキ事ハ老少不定ノサカセハシノ  
人モハヤク 後生ノ一大事ヲ心ニカケテ  
阿弥陀佛ヲフカクタクミテイラセテ  
念佛ヲウスキモノナリアナカシク

第17代  
真如上人

ヤウモナクタク、ヒトスチニ阿弥陀如来ヲ  
一向ニタラシメテツリテタテテトキ  
オモフコトノ一念ヲ元トキカチラス  
赤陀如来ノ攝取ノ光明ヲ分チテク  
身ノ染塵ニアラシホトコノ光明ノ  
ナカニオサメテキニテナリコトスチ  
ワヒカ往生ノサタリタル事ナリ  
サハ南无阿弥陀佛トウス弊ハワヒカ  
他カノ信ヲモル事ナリコト信  
トイフハ南无阿弥陀佛ノイハレラ  
アラヒカサカチナリトコトスチナリ  
サハワヒカイテ、他カノ信ヒトワ  
トルヨリテ極樂ニヤク往生スチ  
コトノサラニオノウカモナレアラ  
殊勝ノ赤陀如来ノ本願ヤアリ  
カチサノ赤陀ノ御恩ヲイカニテ  
報シタテシキコトハタ、マテモ  
オキテモ南无阿弥陀佛トナテカノ  
赤陀如来ノ佛恩ヲ報スチナリサハ  
南无阿弥陀佛トナルコトイカシ  
ナハ阿弥陀如来ノ御タテアリツリ  
カチサタフトサヨトオモヒテワラヨ  
コトウスコトナリトオモフキモノナリ  
アナカシク

第13代  
宣如上人

ヤウモナクタク、ヒトスチニ阿弥陀如来ヲ  
一向ニタラシメテツリテタテテトキ  
オモフコトノ一念ヲ元トキカチラス  
赤陀如来ノ攝取ノ光明ヲ分チテク  
身ノ染塵ニアラシホトコノ光明ノ  
ナカニオサメテキニテナリコトスチ  
ワヒカ往生ノサタリタル事ナリ  
サハ南无阿弥陀佛トウス弊ハワヒカ  
他カノ信ヲモル事ナリコト信  
トイフハ南无阿弥陀佛ノイハレラ  
アラヒカサカチナリトコトスチナリ  
サハワヒカイテ、他カノ信ヒトワ  
トルヨリテ極樂ニヤク往生スチ  
コトノサラニオノウカモナレアラ  
殊勝ノ赤陀如来ノ本願ヤアリ  
カチサノ赤陀ノ御恩ヲイカニテ  
報シタテシキコトハタ、マテモ  
オキテモ南无阿弥陀佛トナテカノ  
赤陀如来ノ佛恩ヲ報スチナリサハ  
南无阿弥陀佛トナルコトイカシ  
ナハ阿弥陀如来ノ御タテアリツリ  
カチサタフトサヨトオモヒテワラヨ  
コトウスコトナリトオモフキモノナリ  
アナカシク

第15代  
常如上人

ヤウモナクタク、ヒトスチニ阿弥陀如来ヲ  
一向ニタラシメテツリテタテテトキ  
オモフコトノ一念ヲ元トキカチラス  
赤陀如来ノ攝取ノ光明ヲ分チテク  
身ノ染塵ニアラシホトコノ光明ノ  
ナカニオサメテキニテナリコトスチ  
ワヒカ往生ノサタリタル事ナリ  
サハ南无阿弥陀佛トウス弊ハワヒカ  
他カノ信ヲモル事ナリコト信  
トイフハ南无阿弥陀佛ノイハレラ  
アラヒカサカチナリトコトスチナリ  
サハワヒカイテ、他カノ信ヒトワ  
トルヨリテ極樂ニヤク往生スチ  
コトノサラニオノウカモナレアラ  
殊勝ノ赤陀如来ノ本願ヤアリ  
カチサノ赤陀ノ御恩ヲイカニテ  
報シタテシキコトハタ、マテモ  
オキテモ南无阿弥陀佛トナテカノ  
赤陀如来ノ佛恩ヲ報スチナリサハ  
南无阿弥陀佛トナルコトイカシ  
ナハ阿弥陀如来ノ御タテアリツリ  
カチサタフトサヨトオモヒテワラヨ  
コトウスコトナリトオモフキモノナリ  
アナカシク

第16代  
一如上人

手持ちの資料ではあるが、御文の変化は、時代ごとに見られる。すべての御文が手元でない限り、正確に判断はできないが、真如上人以後は、五城目に変化がないように思われる。今後、精査して加筆したいと考える。 著者